

## 民話に於ける数の種類と役割 (2)

— 日本民話にみられる「数」の組合わせと伝承機能としての役割 —

清 海 節 子

### 1. はじめに

「数」(「数詞」)<sup>1)</sup>は、なぞなぞやことわざで効果的な役割を果たしている(清海 2013, 2014, 2015a)。清海(2015b)では、口頭によって伝承される民話<sup>2)</sup>における「数」の種類と役割について考察するために、先行する研究の Lüthi(1968)、河合(1977)、新妻(1996)、石川・高橋(2014)を紹介した。また、『日本昔話百選(改訂新版)』(稲田・稲田(編)2003)を対象に、日本民話では、どの「数」がより頻繁に、またどのような用法で表現される傾向があるかについて調査した。100話全体にかんする「数」の出現率を把握することを試み、その結果、データの9割以上に「数」が使用され、特に「1」「2」「3」の頻度が高く、その中でも「1」は、データ全体の8割以上で用いられていることが分かった。しかしながら、各話に於ける「数」の組合わせを考慮に入れて検討することはしなかった。そこで、本稿では、先の調査結果をもとに、話ごとでの「数」の種類と組合わせを考察し、その傾向を探ることとする。また、「数」に於いての反義性(一桁と三桁以上との対立)にも注目する。さらに語り手の伝承能力の視点から「数」の役割を検討する。

次の2節では、清海(2015b)で、調査したデータの結果をもとに、各話で用いられている「数」の組合わせを扱うため、種類別に分類する。3節では、種類別ごとに「数」の性質と傾向を考察する。4節では、今回の民話の中で最も「数」の種類が多い2話を選び、実際のテキストでの「数」の用法を調査し、その特徴を明らかにする。5節は、語り手の伝承機能に注目し、「数」の役割を模索する。最後の6節で結論を述べる。

### 2. 「数」の出現率と組合わせ

清海(2015b)では、『日本昔話百選(改訂新版)』(2003)の100話を調査し、結果を一覧表(清海 2015b :62-67)で提示した。このデータ結果から分かったことで、先の研究では詳細に検討されなかった点について、以下で考察する。

清海(2015b)では、一桁から五桁までの「数」が見つけられた。それぞれの桁に分けて、用いられている数詞とそれが出現する話の数を示すと以下のようになる。

表1 各数詞を含む話の数(総数100話)

一桁	1	2	3	4	5	6	7	8	9
話数	87	68	45	10	19	12	16	9	1

二桁	10	12	13	15	20	23	33	40	60	77
話数	6	4	1	2	3	1	1	1	1	1

三桁	100	200	699	700	999	何百
話数	6	1	1	1	1	1

四桁	1000	2000	3721	何千
話数	6	2	1	1

五桁	10000	何万
話数	1	1

表1から、一桁は、1から9までのすべての数詞があるが、二桁は10種、三桁は6種、四桁は4種、五桁は2種と減少していることが観察される。一桁の中でも「1」「2」「3」が他の数詞を大きく引き離し、数詞が含まれる話92話を基準にすると、最多の「1」(87話)は、95%、次に多い「2」(68話)

と「3」(45話)はそれぞれ、74%と49%であることが分かった。また、「1」(87話)、「2」(68話)、「3」(45話)の後が、「4」(10話)でなく、「5」(19話)、「7」(16話)、「6」(12話)になることが注目すべき点である。つまり、含まれている話の数が多い順に並べると「1, 2, 3, 5, 7, 6, 4, 8, 9」になる。

次に、一つの話に何種類の数詞が含まれているか調べることにする。数詞を含まない話は8話あったので、残りの92話を数詞の種類で分類すると表2のようにになる。

表2 数詞の種類に対応する話の数(総数92話)

数詞の種類	1	2	3	4	5	6	8	11	12
話の数	11	21	24	13	15	4	2	1	1

さらに、表2で示された種類別で、どの「数」、または、どの「数」の組み合わせ(1種類以外)が用いられているかについて検討する。(1)は、「数」の種類別に対応して、実際にどの「数」が使われているかを波括弧の中に示している。少ない「数」を基準に組み合わせを並べ、その後に続く丸括弧内には、それぞれの「数」の組み合わせが用いられている話の総数を書き入れた。

- (1)・1種類 [11話]…{1}(10話), {2}(1話)  
 ・2種類 [21話]…{1, 2}(12話), {1, 3}(3話), {1, 5}(1話), {1, 6}(1話), {2, 3}(1話), {2, 7}(1話), {1, 1000}(1話), {1, 10000}(1話)  
 ・3種類 [24話]…{1, 2, 3}(14話), {1, 2, 5}(1話), {1, 2, 8}(3話), {1, 3, 60}(1話), {1, 12, 23}(1話), {1, 12, 100}(1話), {1, 5, 6}(1話), {2, 3, 7}(1話), {2, 5, 6}(1話)  
 ・4種類 [13話]…{1, 2, 3, 5}(1話), {1, 2, 3, 100}(2話), {1, 2, 4, 5}(1話), {1, 2, 5, 6}(1話), {1, 2, 5, 7}(1話), {1, 2, 7, 10}(1話), {1, 2, 8, 33}(1話), {1, 2, 10, 15}(1話), {1, 2, 13, 20}(1話), {1, 2, 100, 200}(1話),

- {1, 2, 何千, 何万}(1話), {1, 4, 5, 100}(1話)  
 ・5種類 [15話]…{1, 2, 3, 4, 5}(2話), {1, 2, 3, 4, 1000}(1話), {1, 2, 3, 5, 6}(1話), {1, 2, 3, 5, 7}(1話), {1, 2, 3, 5, 3721}(1話), {1, 2, 3, 6, 7}(2話), {1, 2, 3, 7, 8}(1話), {1, 2, 3, 7, 100}(1話), {1, 2, 3, 999, 1000}(1話), {1, 2, 3, 1000, 2000}(1話), {1, 2, 4, 5, 7}(1話), {1, 3, 4, 6, 15}(1話), {1, 3, 5, 6, 10}(1話)  
 ・6種類 [4話]…{1, 2, 3, 4, 6, 7}(1話), {1, 2, 3, 4, 1000, 2000}(1話), {1, 2, 4, 5, 6, 7}(1話), {1, 2, 5, 6, 10, 20}(1話)  
 ・8種類 [2話]…{1, 2, 3, 4, 5, 7, 8, 12}(1話), {1, 2, 3, 4, 7, 8, 20, 40}(1話)  
 ・11種類 [1話]…{1, 2, 3, 7, 8, 10, 77, 699, 700, 何百, 1000}(1話)  
 ・12種類 [1話]…{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 12, 13}(1話)

次の節では、上で整理された種類ごとの組み合わせについて考察し傾向を導き出す。但し、最後の11種類と12種類は一話だけであり、他の種類とは異なるとして、一緒に扱うことにする。

### 3. 種類別の「数」の性質について

前節で見たように、100話の中92話に「数」が用いられていることが確かめられた。この節では(1)で示された「数」の組み合わせを参考に、種類別の性質をより綿密に検討していく。以下11, 12種類は一緒に扱うが、その他は、組合せ数が少ない順に考察する。

#### 3.1 1種類 [11話]

1種類だけ用いられている話では、11話中10話(約91%)に「1」が用いられ、二桁、三桁、四桁の数詞は見つからなかったことから、数詞が1種類の場合には、「1」である傾向が高く、例えば、「100」や、「1000」だけが「数」として使われている話はない傾向があると推測される。実際に11話を見ると、「1」及び「2」が1回だけ話に使われているのは、6話であり、5話は複数回繰り返し

て使われている。一番多いのは、『39. 花咲爺』で、「も一度」、「もう一つ」x2、「一本植えて」、「一抱えもある木」、「一面花に」、「ひとつ撒いて」の7回である。この場合「1」が、以下のような3種類の音で表現されていることがわかる。

(2)	「1」	{	/ichi-/	例：「一面」
			/hito-/	例：「一つ」
			/ip-/	例：「一本」

### 3.2 2種類 [21話]

2種類の数詞が使用されている話に関しては、{1, 2}の組合わせが21話中12話であり、半数以上(57%)になる。その他の例でも、{2, 3}{2, 7}(各1話)を除いて、すべてに「1」が含まれている。つまり、2種類の数詞が使われている話の約91%に「1」が見つかっている。また、17話(81%)では、「1」と「1」以外の一桁の「数」が使われている。残りの4話(19%)は、「1」+ 四 / 五桁の「数」(2話)、「2」+ 一桁の「数」(2話)である。換言すると、2種類の数詞が使われている話では、約91%に「1」が見つかることから、「1」と別の「数」(一桁)が用いられる傾向が高いと言える。

### 3.3 3種類 [23話]

3種類の数詞が用いられている話の中では、一番多い組合わせは{1, 2, 3}で、24話中14話であり、約58%になり、2話を除くと、すべてに「1」が含まれている。3種類の数詞が使われている話の約92%に「1」が見つかるため、2種類の数詞が用いられている話と同様に、「1」が用いられる傾向が高く、二桁、三桁の「数」を含む話は3話だけで、21話(88%)は、一桁の「数」との組合わせである。以上から、3種類の数詞が使われている話では、「1」を含み、他2種類の一桁の「数」との組合わせの傾向が高いと言えよう。

### 3.4 4種類 [13話]

4種類の数詞が見つかる話は、2, 3種類の数詞が使われている話とは性質が違って、特定の組

合わせが見つかりにくい。2種類の数詞の組合わせは{1, 2}が、全体の57%であり、3種類の組合わせでは、{1, 2, 3}は61%になる。つまり、2, 3種類の数詞の場合、半数以上が続いた「数」の組合わせであった。ところが、不思議なことに、4種類の場合は{1, 2, 3, 4}が一例もないのである。さらに、その組合わせに近い{1, 2, 4, 5}が1話だけ、また、{1, 2, 3, 100}は2話で、残りの11話は、それぞれ異なった「数」の組合わせである。一方で、1話を除いては、4種類の数詞のうち、2種類が「1」と「2」であり、約92%の話に共通している。また、4種類の数詞のうち3種類が、1, 2, 5である組合わせ{ (1, 2, 5, x) : x ≠ 1, 2, 5 } (4話)の方が、1, 2, 3という連続する「数」の組合せである{ (1, 2, 3, x) : x ≠ 1, 2, 3 } (2話)より多いということは、「2」の次に、「3」より「5」が好まれることが暗示されていると思われる興味深い。二桁以上の「数」を含むのは、13話中8話、三桁以上の「数」が使われているのは、4話であった。

以上から、4種類の数詞が用いられている話で、92%という高い頻度で見つけられた組合わせは、{ (1, 2, x, y) : x, y ≠ 1, 2 } であり、さらに、二桁以上の「数」を含むというある程度の傾向(62%)も観察された。

### 3.5 5種類 [15話]

5種類の数詞が用いられている話は、4種類の数詞が用いられている話で確認された特徴と同様に、共通する特定の組合わせは見つからなかった。最も多い組合わせは、{1, 2, 3, 4, 5}と{1, 2, 3, 6, 7}で各2話あった。また5種類の中で、3種の「数」1, 2, 3に限ると、{ (1, 2, 3, x, y) : x, y ≠ 1, 2, 3 } は15話中12話で、80%となるが、一方で5種類の数詞の内4種に限定すると、{1, 2, 3, 4, x} : x ≠ 1, 2, 3, 4}が4話で、{ (1, 2, 3, 5, x) : x ≠ 1, 2, 3, 5 } が5話であり、連続する「数」が多いというわけではないことも分かった。これは、3.4でも観察された「5」が「4」より好まれる傾向が示されていると考えられる。また、二桁以上の「数」を含む

のは、15話中7話で、3桁以上が5話で見つかった。以上から、5種類の数詞が用いられる共通項として観察されるのは、組合わせが $\{(1, 2, 3, x, y) : x, y \neq 1, 2, 3\}$ である高い割合(80%)と、二桁以上の「数」を含むというある程度の傾向(62%)である。

### 3.6 6種類 [4話]

6種類の数詞が用いられている話は、5種類の「数」を含む話と比較して、突然減少していることが明らかである。実際今回検討している100話の中で、1～5種類までの数詞が使用されている話は、84話になり、「数」を含まない8話との合計は、92話(92%)である。つまり、今回扱っている話にかんしては、「数」を含むとしても5種類までが大多数であることを意味している。それも理由だろうが、6種類の「数」を含む話の総数が4話だけであり、同じ数の組合わせは見られなかった。しかし、6種類の内で5種類が、1, 2, 4, 6, 7である組合せ $\{(1, 2, 4, 6, 7, x) : x \neq 1, 2, 4, 6, 7\}$ が2話に見つかった。また4種類の「数」では、1, 2, 3, 4が共通する組合せ $\{(1, 2, 3, 4, x, y) : x, y \neq 1, 2, 3, 4\}$ が2話に見つかった。二桁以上の「数」を含むのは2話で、三桁以上が1話で見つかった。

以上から、6種類の数詞が用いられる話では、組合わせが $\{(1, 2, 4, 6, 7, x) : x \neq 1, 2, 4, 6, 7\}$ である割合(50%)と、二桁以上の「数」を含むというある程度の傾向(50%)が推測されるが、サンプルが4話だけであったため、傾向として考えることは無理があるように思われる。

### 3.7 8種類 [2話]

8種類の「数」を含む話の数は、6種類に続いて少ないため、一緒に考えても良かったかもしれない。しかし5種類までが15話あったのが、6種類では、なぜ4話にまで減少したかという理由を探りたかったので、分けて考えることにした。8種類の「数」が用いられている話の数は、当然6種類が使われている話の総数(4話)より少なくなり、半減している。その理由とは、語り手が対処するにはやや困難になる程度の種類の多さであ

ると考えられる。それでは、実際にどのような「数」が使われているのであろうか。2話だけしかデータがないが、両話に共通するのは、一桁の「数」が少なくとも8種類のうち6種類使われている点である。また二桁が使われているが、三桁が使われていないことが認められる。つまり、8種類まで「数」が増えると、語り手はできるだけ近接する「数」を使おうという意識が働くと推測できる。

### 3.8 11種類 [1話] と12種類[1話]

100話の中で、最多の11種類と12種類は1話ずつしかないが、他の話とは、その種類の多さから別格であると見なされるべきであろう。ただ、サンプルが2話だけなので、用いられる「数」の傾向については、検証することが難しいので推測に留まる。11種類が使われている話は、一桁が1, 2, 3, 7, 8という5種類の「数」で、残りが、二桁は「10」と「77」、三桁は「699」、「799」と「何百」、四桁は「1000」のみから成る。一方、12種類の「数」は、一桁と二桁を含み、「12」だけを除いて連続する、「1」から「13」までの近接する「数」で成立している。2話だけの分析ではあるが、二極化された用法が見られた。一つは、桁が低い「数」の中で、できるだけ連続し近接する「数」を使うことであり、もう一つは、語り手の記憶に留まる範囲で、数桁以上に渡り、離れた「数」を使うことである。

### 3.9 まとめ

3.1-3.8で、種類別の「数」の性質について、主に出現する「数」の組合わせに注目しながら検討した。その結果、「数」の種類に応じての性質を次のように要約することができる。「数」が1種類だけの場合には、「1」である可能性が高く、二桁以上の「数」が用いられる可能性が低い傾向があると考えられる。2種類の数詞が使われている話は、約91%に「1」が用いられているので、「1」と別の「数」(一桁)との組合わせの傾向が高いと言える。3種類の数詞が用いられる話では「1」を含み、その他の「数」も一桁の「数」である高い傾

向が見られた。4種類の数詞が用いられている話では、 $\{(1, 2, x, y) : x, y \neq 1, 2\}$ という組合わせになる傾向が高く、約6割が二桁以上の「数」を含むことも認められた。5種類の数詞が用いられている話での組合わせは、 $\{(1, 2, 3, x, y) : x, y \neq 1, 2, 3\}$ になる傾向があり、さらに4種類の数詞の場合と同様に、約6割は二桁以上の「数」を含むことが観察された。

6種類の数詞が用いられる話は、4話だけであったので、傾向として提示はできない恐れがあるが、 $\{(1, 2, 4, 6, 7, x) : x \neq 1, 2, 4, 6, 7\}$ という組合わせが50%で、二桁以上の「数」を含む割合も50%であった。同様に、8種類を含む話も2話しかないため、「数」の組合わせは、傾向として示せないが、8種類のうち3分の2以上は一桁であったし、全体として近接した「数」が用いられていることが分かった。最後に11種と12種の「数」を含んだ各一話の分析結果から、桁が低い「数」の中で、できるだけ連続し、近接する「数」を使う用例と、数桁以上に渡り離れた「数」を使うという二極化された用法が観察された。

以上から、全体の傾向が明確になったが、もう一度、近接関係という視点から捉え直してみよう。理想的な近接関係を考えて、最小数の「1」からの「数」の連続性がどの程度保たれているかを確認してみよう。データから観察されるのは、1種類では、 $\{1\}$ が91%、2種類では $\{1, 2\}$ が57%、3種類では $\{1, 2, 3\}$ が61%で、ここまでは半数の話に連続した「数」が見つかっている。しかしながら、4種類では $\{1, 2, 3, 4\}$ が見つからなかった。5種類では、 $\{1, 2, 3, 4, 5\}$ が13%認められたが、それ以上の種類、即ち、 $\{1, 2, 3, 4, 5, 6\}$ からの連続は見つからなかった。従って、今回のデータでは、 $\{1, 2, 3\}$ までの結び付きがある程度強いが、それ以降、即ち $\{1, 2, 3, 4\}$ 以上は、連続性が保たれにくい傾向を表していると考えて良いのではないだろうか。

以上、「数」の組合わせを検討したが、それに関連する反義性についての考察も忘れるべきではないだろう。「数」が反義的に使用されているという

のは、低い桁と高い桁での「数」の対比であり、具体的には、一桁の「数」が三桁以上の「数」と対比される場合を扱うことにする。分かりやすい例は、2種類の「数」だけが使われている話で、《1-1000》や《1-10000》が「数」の反義関係に相当すると考えられる場合である。「数」の存在が多種になると複雑な関係が生じるので、少なくとも三桁以上の「数」が含まれる話から、組合わせを取り出し検討することにする。以下のように、[ ]内には、各種類の中で、三桁以上との組合わせの数を左側に、総数を右側に書き入れた。例えば、2種類の組合わせは全部で21例であるが、そのうち2例に反義的な組合わせが見られること分かる。また、《 》の中には、用いられている数を少ない順に並べ、三桁以上には下線を施した。

- (3)・2種類 [2/21話] ... 《1-1000》(1話),  
《1-10000》(1話)  
・3種類 [1/23話] ... 《1-12-100》  
・4種類 [5/13話] ... 《1-2-3-100》(2話),  
《1-2-100-200》(1話),  
《1-2-何千-何万》(1話),  
《1-4-5-100》(1話)  
・5種類[5/15話] ... 《1-2-3-4-1000》(1話),  
《1-2-3-5-3721》(1話),  
《1-2-3-7-100》(1話),  
《1-2-3-999-1000》(1話),  
《1-2-3-1000-2000》(1話)  
・6種類 [1/4話] ...  
《1-2-3-4-1000-2000》  
・11種類 [1/1話] ...  
《1-2-3-7-8-10-77-699-700-何百-1000》

上の組合わせから、11種類は、1話だけなので除外すると、4種類では38%、5種類では33%が反義的要素として「数」が用いられていることが分かる。割合として一番多いのは、4種類の「数」が使用されている場合である。より詳しく述べると、5種類の「数」の中では少なくとも3種類が一桁で、残りの2種類以下が三桁以上である。つ

まり、一桁の方が多く、桁が多い「数」の方が少ない。この傾向は他の例でもおおよそ当てはまり、低い桁の「数」の方が高い桁の「数」を上回る傾向があると言える。11種は種類が他に比べてかなり多いことから例外と考えられる。そこで今回のデータの分析結果から、相対的に4種類から5種類の数詞が使われている話には、反義的用法が多い傾向がみられ、同時に2種類と3種類の数詞が用いられている話には、数詞が反義的に使われない傾向があると推測される。

#### 4. 多種の数詞を含む話

前節では、種類別の性質をより綿密に検討した。本節では、民話のテキストで実際に「数」がいかに使われているかを確認する。紙面の都合から、多種の数詞を含む2話を選び、最初に、11種の数詞を含む『龍宮女房』<sup>3)</sup>を扱う。次に12種の数詞を含む『うぐいすの里』<sup>4)</sup>については、数詞だけを取り出して検討する。

##### 4.1 11種の数詞を含む『龍宮女房』

###### (鹿児島県大島郡喜界島)

昔あったことには、それはそれは不幸な一家があった。大勢おった家族が、どうしたわけだかばたばたと死んでしまつて、母親と末もまだ若い男の子だけが残ったそう。貧乏で自分の地所を持たなかったから、親子二人は、たちまち食って行くことができません。考えた末、若者は、山から花をとって来ては売り始めたが、その日は、どこの家でも、「花はいま買ったばかりじゃけ」とけ言つて、一人も買ってくれなかった。

若者が、売れ残った花をかかえて、ぐんなりして歩いておったら浜へに出た。白い波がサーサ、サーサと折れては返すのを見ているうちに、「そうだ、ネインヤ（龍宮）の神様にこれをさしあげよう」と思いついて、

「ネインヤの龍神さまへ私の花をあげ申す」

と言つて、花束を沖へ向けて投げこんだ。まっ青い海に渦巻きが起こつて花束は海に吸い込まれた。若者が、とにかく今日はいいことをした、と思つ

て帰りかけると、「もし、もし」と呼びとめる者がある。見れば海の上に大きな亀がぼっかり浮いていた。

「先ほどは、よか花をどっさりもらつて、ありがとうよ。私は、龍神さまの使いですが、ネインヤでは正月の花がなくて困っていたところでしたから、龍神さまがたいそう喜ばれて、あなたをぜひネインヤへお連れしてこいとのことです。私の上に乗ってください」

と、岸边まで、大きな背中をうんがりうんがりと寄せてきた。ためらっている若者に、「ネインヤまではほんの一息ですから」としきりにすすめるので、若者は、とうとう亀の背中にまたがった。亀は、

「さあ、あちらへ着くと、龍神さまがあなたに何がほしいか聞かれるはずですから、その時には、『神様の女の子こそほしいもので』と答えるのですよ」

そう言つて教えてくれた。二人は水にはいったかと思うと、たちまちのうちにネインヤの門口まで来ていた。門には、七人の番人がおり、白い魚は白鳥になり、赤い魚は赤い鳥になってあちこち飛び回り、美しいことといたら、たとえようもない。神様は、若者が見たこともないごちそうを並べたててもてなしてくれた。夢のような三日が過ぎて、帰る時が来た。

「ほんとうに楽しか思いをしましたが、母が待つておりますからおいとまします」

と言うと、龍神さまは、

「お前の一番ほしか物をみやげにあげよう。何なりと望め」

と聞かれたから、若者は亀の言葉のとおりを言つた。

「龍神さまの女の子こそほしかと思います」

「そうか。私の大事な一人娘だが、どうしてもほしかと言うならあげよう。妻にしてやつてくれ」と清らかな娘を下された。

若者は、新しい女房を連れて、もとの浜辺にもどつてみれば、ただの三日と思つたのに、人間界でははや三年の月日が過ぎていて、母親は、石に

もたれて飢え死にをしていたと。

「ああ、貧乏ゆえに母親にひもじい思いをさせ、あげくは殺してしまった」。

若者がながきさらにすがりついて悲しんでいると、女房は、

「もう嘆くことはなか。お母さんはよみがえります。私に任せてください」と、ネインヤから持ってきた生き鞭を取り出した。ながきさらに水をそうそうと掛けて、鞭で一撫でした。するとふしぎや、母はふうと息をふきかえた。二度撫で 三度撫でると、すっかり元気になって、「うーん」と起き上がった。親子は手を取り合って喜び、つもる話を話し合うのやった。

さて、三人で家にはいって見たが、三年の間、雨風にさらされておっは、住むに住めないありさまだった。女房は、

「三人で敷地の用意ができれば、あとは、宝の小槌で何とかしましょう」

と言ったから、力を合わせて、野原の雑木を切り倒して屋敷ごしらえをした。ネインヤから持ってきたウッチシ小槌を取り出して、一振り振ると、そこに大きな光るような家がずはっと出た。続けて家のそばには、八とまえ<sup>5)</sup>やら十とまえ<sup>6)</sup>やらの倉を打ち出し、三度目には、倉にぎっちりつまるほどの米を出したから、みるみるうちに若者は恐ろしいほどの金持ち物持ちになり、龍宮女房のお陰で長者の暮らしを始めた。

さて、ネインヤから来た女房は、天界、地界、水界と、どこを探しても見つからんほど美しか女子（おなご）であったから、その評判は殿様の耳にまで届いてしまったと。そんな女子をこそ自分の妻にしたいと、殿様は考えをめぐらせて、ある日、若者を呼び出して、

「千石の米を、明日（あす）までに上納するか。できんとあれば、お前の妻はおいが取らす」と言い渡した。あんまり無理な難題に、若者は青ざめ、頭をかかえて帰ってきた。女房に、  
「どんな御用でしたか」

と聞かれても返事もできない。「男ともあろうものが、そんな事でどうします」ときつく叱られたの

で、やっと殿様の言葉を伝えた。

「おや、そげん事なら造作（ぞうさ）もなか」と女房は夜なかになるのを待って、みそぎをした。清らかなからで浜辺におり立つと、海へ向かってさし招いた。すると何百という馬がそれぞれ米俵を負うて、水の中からサワサワ出てくるのだった。さっそくに俵を家の庭に運びこませると、馬どもは海へ帰した。あくる朝、若者が使いをたてると、殿様の家来は何百頭もの馬を連れて米俵をひき取りに来た。殿様は、「うーん」とうなって、

「こしゃくなやつじゃ。もう一度男を連れてこい」と命じた。今度は、

「千尋<sup>7)</sup>の縄を明日までに納めよ。できんとならば、お前の妻はおいが取らす」

と、こう言い渡した。若者がしょぼしょぼしょぼくれて帰ってくると、女房は聞いた。

「今日の御用は何でしたか」

「明日までに千尋の縄を出さなければ、お前を召し上げるといふのだ」

「おや、そげん事ならわけはなか。私にお任せください」。

女房は、また真夜中がくるのを待って、みそぎをすると浜辺に立った。海へ向かってさし招くと、この前同様に、千尋の縄を負うた馬が出てきた。さっそく明けの朝、若者が上納すると、殿様は、「うーん、またやりおったか」と、腹だたしげにこう言った。

「では、正月元日に、六百九十九人の家来を連れて、お前の妻を見にゆくぞ。ごちそうと泡盛十七盃<sup>8)</sup>したくしておけ」。

いよいよ元旦に、ずらずらと七百人の行列がやって来たが、殿様は考えるところがあって、自分と一番下役の衣装をとりかえ、上役と下役とをことごとく逆さまにした装いでやって来た。女房は、人一倍<sup>9)</sup>さがとりが早かったから、障子の隙間から一目<sup>10)</sup>見ただけで、ははあ、我らの目をあざむいて、殿様に対して粗相があれば、すぐに引っ張りたての魂胆であろう、と見破っておった。

女房は、かいがいいいたすきがけで、一度に七百人のお膳をさっと出した。お客が席につこうと

すると、「**いっとき**待ちたぼうれ（ちょっとお待ちください）」と粗末な身なりの殿様の前に進み出て、「殿様、ようこそお越しを」

とほえんで、**一番**上座に直ってもらった。それから**七十七壺**の泡盛を出して大盤ふるまいがつづいた。やがて、いい機嫌になった殿様は女房に命令した。

「もっと何か、<sup>げいごと</sup>芸事でもだしてみせよ」

「荒いと（大芸の仕事歌）がよい」

「はい、ではただいま」

と答えて、女房は小箱を持って来てさっと開けた。中からは**何百人**という男や女が、晴れの衣装をつけてとび出し、面白おかしく囃したり、舞ったり、まるでにぎやかな祭りのようだった。殿様は、

「ほう、見事じゃが、今度は細い<sup>こま</sup>とば出して見せよ」

「殿様、細いとは危なか。どうぞおやめくださいませ」

「かまわん。わしの命令じゃ。出せというのに」。そこで、女房が別の小箱を開けたところが、鉢巻しめて、刀を持った小人（こびと）があとからあとから躍り出て、「エイヤ、ハッチ、エイヤ、ハッチ」と殿様から家来まで、すっかり切り捨てた。とみるまにそこに大川ができて、切られた人を残らず海に押し流してしまったと。

それで若者は殿様になり、夫婦は安気に暮らしたということだ。

にやーじゃ（昔話はそれっきり）。

## 4.2 『龍宮女房』の数詞

4.1.1で見た数詞を出現順に、助数詞や助詞なども含めて取り出すと以下のようになる。

- (4) 一家が、二人は、一人も（買ってくれなかった）、一息です、二人は、七人の、三日が、一番ほしか物、一人娘だ、三日と、三年の、一撫で、二度撫で三度撫で、三人で、三年の、三人で、一振り、八とまえ、十とまえ、三度目に、千石の、何百、何百頭もの、一度、[千尋の縄を] x 3、六百九十九人の、七十七壺、

七百人の、一番、人一倍、一目（見た）、一度に、七百人の、いっとき、一番上座に、七十七壺の、何百人

上で並べられた「数」を観察すると、延べ40の「数」が使われており、助数詞に注目すると、40のうち11は、基本的な助数詞の「人」<sup>7)</sup>で約27.5%である。簡素化するために、(4)をアラビア数字だけで表すと次のようになる（小文字‘x’は、何百の「何」を示す）。

- (5) 1-2-1-1-2-7-3-1-1-3-3-1-2-3  
-3-3-3-1-8-10-3-1000-x100-  
x100-1-1000-1000-1000-699-77-700  
-1-1-1-1-700-1-1-77-x100

最初から19番目までの「数」は、一桁である。その後、後半に二桁、三桁、四桁が登場する。つまり前半には、一桁だけ現れ、後半には、一桁「1」が7回と、二桁「77」が2回、三桁は3種類「x100」（3回）、「699」（1回）、「700」（2回）そして、四桁「1000」が4回である。この話は、11種類の数詞が使われているので、特殊な例と考えられるかもしれないが、前半は一桁だけが出現し、後半から二桁以上が現れるだけでなく、また、一桁の「1」と「3」がそれぞれ続けて用いられていることも特徴であろう。つまり、「1」は4箇所、「1-1」「1-1」「1-1-1-1」「1-1」、また、「3」は、「3-3」「3-3-3-3」の二箇所連続している。<sup>8)</sup>

## 4.3 12種類の数詞を含む『うぐいすの里』（山形県最上郡）

今回のデータで一番種類の多い数詞を含むこの話には、12種類の数詞が使われている。話の内容は次の通りで非常に単純である。お茶屋の番頭が毎朝お茶を買いに来るきれいな女性の後をつけて行くと、立派な御殿がありご馳走してもらう。その女性は少し留守をするので、番頭にはそこで遊んでも良いが、十二座敷は決して見ないようにと言っている。しかし、番頭は1月から12月までの各



月を体験できる12の座敷を見てしまう。すると、  
ホウホキョと聞こえ、番頭は山の中にいる。彼は  
人が容易に行けない「うぐいすの内裏」にいたの  
である。

実際の話では、月の中で、1月、11月、12月は、  
それぞれ「正月」「霜月」「師走」として表現され  
ているので、「数」は、2月から10月までが順に用  
いられている。以下は、テキストでの数詞を出現  
順に序数や助詞を含めて取り出して並べたものと、  
アラビア数字だけで表記したものである。

(6) 五文<sup>もん</sup>ずつ、ひとり、十二座敷、二月、三月、  
五人ばやし、四月、五月、六月、七月、五色  
金銀の短冊、十三日、八月、九月、十三夜、  
十月

(7) 5-1-12-2-3-5-4-5-6-7-5-13-  
8-9-13-10

この話では次の2点に注目すべきである。まず、  
「5」が4度繰り返されているが、「五月」が一度  
使われている以外、最初に「五文」次に「五人ば  
やし」、「五色」と「五月」を囲んで同じ間隔で使  
われている。また1月、11月、12月は、「正月」「霜  
月」「師走」で表されているが、「ひとり」「十二座  
敷」、「十三夜」が含まれ、「11」以外の「数」で「1」  
から「13」まで、連続する数詞が用いられている。  
語り手が無意識ではあろうが、近接の「数」を利用  
していることが印象的である。

#### 4.4 まとめ

4.1-4.3で、民話のテキストの中で多種の「数」  
がいかに使用されているかについて観察し、「数」  
は不規則に使われているのではなく、秩序だった  
方法で、提示されていることを発見した。11種の  
一桁から四桁までの「数」を含む『龍宮女房』は、  
前半に一桁の「数」だけが使用されているが、後  
半では、一桁から四桁までの数が用いられている。  
同時に、話を通して「1」と「3」が続けて繰り返  
されている点も特徴的である。一方で、短い話で

はあるが、12種の数詞を含む『うぐいすの里』で  
は、「1」から「13」までの近接する「数」(但し「11」  
を除く)が用いられていることが分かった。

### 5. 語り手たちの伝承能力

前節では、テキストの中で「数」の用いられ方  
を観察し、その特徴を提示した。この節では、語  
り手の伝承能力という視点から、「数」の用法との  
関連性を考察する。一人の語り手が同一の話を伝  
える伝承能力について、5.1では、佐久間(1983b)、  
5.2では高木(1983)の研究を基に検討する。5.3で  
は、民話から離れた研究ではあるが、Lord (1960)  
を参考に、吟遊詩人の口誦伝承能力に言及する。

#### 5.1 佐久間 (1983b)

佐久間(1983b: 28-9)によると、同じ語り手でも  
語る時によって、昔語りには必ず変化があると述  
べている。佐久間は、優れた語り手である新潟県北  
浦原郡豊浦町切梅の波多野ヨスミ女に1976年6月  
から1979年2月まで採話調査をした。佐久間は、ヨ  
スミ女は、伝承に忠実であったので、恣意的に話  
の内容を変える可能性はないと推測し、変更があ  
るとすると、なぜ生じるのか、どの部分で起きる  
のか、法則性があるのか等は、語り手の本質に関  
連する重要課題であると指摘している。佐久間が  
ヨスミ女の語る同話を3話以上採録したものが相  
当数あるが、同じ条件で語られたわけでないので、  
比較はできないと述べている<sup>9)</sup>。ヨスミ女は「天  
気のよい日と悪い日でも語りが違う。しかし聞いた  
通りに語り、筋は変えることがない」と言った  
と報告されているが、水沢(1972)が採録した同女  
の語りを、佐久間が採録したものと比べると、同  
話でもモチーフや、要素に変化があるものが見出  
されるという。

#### 5.2 高木 (1983)

次に一人の語り手が異なる機会に同一の話を語  
った記録を比較した研究を紹介する。高木(1983)  
は、鳥取県八頭郡用瀬町に住む優れた伝承者で、  
約二百話のはなし手である「安東花」の特質を明

らかにしているが、伝承機能と伝承意識という2点に注目している。つまり、伝承者の生活と話の語りがどのように関連しているかという伝承機能の問題と、伝承者が説話<sup>10)</sup>をどのように表現し、説話をいかに体系的に捉えているかという伝承意識に注目している。本稿で関連するのは、主に前者の伝承機能であるので、その部分の説明に注目して考えていく。明治32年生まれの花唄は、父親に強く愛され、兄弟が男だけであったことや、父親のはなしを共に聞いたのが甥であったことなど、周囲に男性が多くいたことは、花唄の話法が男言葉に近いという資質を与えた。また、女の伝承は母からだけであったために、本格的な昔話が少なかったのである。それ故に、話法が骨太で、簡潔な要領を得た男性的な話ぶりであり、枝葉末節にこだわらない伝承方法で、大まかな骨組みだけを簡単に伝えて終えることが多いと述べられている。花唄は、一定の語り口で文芸的に伝承しようとする語り手が説話に求める機能とは明らかに異質で、話の内容を知識として知っているからであり、彼女にとって、はなしの機能は、知的興味を満足させることなのである。<sup>11)</sup>

花唄のほとんどののはなしには、定まった語りではなく、骨格は変わらずとも、細部表現は語る度に激しい変化がみられると報告されているが、それを裏付けるデータとして、高木は、1977年、1978年、1979年の3回にわたって「太閤の千成瓢箪」という同じ説話を記録して比較している（高木1983: 113-120）。高木によると、この説話は一般には、昔話の中の産神問答・水の神型として語られるのだが、安東花は、それを太閤秀吉誕生の伝説として伝承していると述べている。話全部を取り扱うと長くなるので、以下に話の冒頭部だけに限定して3例を比較してみるが、一回ごとに興に任せての異なる語り口であることが明らかである。

#### (8) 1977年：

あの子、お産の神さま知らんけど、お産のついでにな、あの、太閤さんのな、な、秀吉だが、太閤さん太閤さん言うてる。あれの父親（てておや）

がな、母親がおおきな腹しとるときに、父親が商人（あきんど）に出て。商いに出て、そがして、暮れて、まあ、よつ堂に、夜（よ）明かいて去（い）なあ、と思って。よつ堂に泊まっただって。そうしたところが、他の神さんが、

「おうい、弁天さんよ、あの、こうこうしたところのお嬢（かあ）がお産しよるけえ、行きてみたらあ」

誘われるだって。

#### (9) 1978年：

父親（てておや）がな、商人（あきんど）しよっただがな、昔のものはしよっただけな<sup>あ</sup>、商いを。それで、戻りに、日が暮れて、歩けんようになって、よつ堂に

「まあ、今夜、宿してつかあさんせえ」

ちゅって、よつ堂入って、泊まっただってな<sup>あ</sup>。

「お嬢（かあ）は大きな腹しとるけえ、去（い）んでみたらにやあならんけど、まあ、この暗いのは歩けんだけえ」

つちゅって、よつ堂に泊まらしてもらっただって。

そがしたら、他の神さんが通る。

「なにやら家のお嬢がお産するけえ、だけえ、行きてみたらあ」

って、その神さんが誘われただって。

#### (10) 1979年：

太閤秀吉は、百姓屋の人だけな<sup>あ</sup>、あれは。それで、お父さんは貧乏なだけえ、商人（あきんど）をして、そえで戻りおうたら遅うなって、よつ堂に、ま、今度は、ここに泊めてもらわあやあ、と思って泊まるし、我家（わけ）のお嬢（かあ）さんは大きな腹しとっただけな。そいところが、泊まるところが、よその神さんが、

「誰やらや（その神さんの名<sup>あ</sup>言って）、誰や家（げ）のお嬢がお産をするけえ、そだけえ、出てきてみたら<sup>あ</sup>いや」

神さん言われるだって。

次に「数」に注目して見てみよう。以下に、そ

それぞれの語りに見出される「数」を登場する順に示すことにする。「よつ堂」も「4」を連想することから、「数」として含めた。

(11)

1977年: よつ堂, よつ堂, 一夜, も一つ, 四つの歳, 四つの歳, 千瓢箪, 四つ, 千成瓢箪, 一つに, 一遍に, 千成瓢箪, 千成瓢箪, 千成瓢箪, 千成瓢箪

1978年: よつ堂, よつ堂, よつ堂, 四つぐれえ, 千こしらえて, 千成瓢箪, 千も, 千成瓢箪, 千成瓢箪

1979年: よつ堂, 四つぐらい, 千こしらえて, 一遍に, 千成瓢箪, 千成瓢箪

以上の「数」をアラビア数字に変えたと以下のようになる。

(12)

1977年: 4-4-1-1-4-4-1000-4-1000-1-1-1000-1000-1000-1000

1978年: 4-4-4-4-1000-1000-1000-1000-1000

1979年: 4-4-1000-1-1000-1000

上の「数」の種類が「1」「4」「1000」だけであることは共通しているが、1978年には「1」が現れてはいない。しかし、興味深いことに、全体の印象は似通っていて、最初に「4」、中央部分から後半にかけて「1000」が登場している。つまり、3種類の「数」だけが使われていて、他の「数」が現れていないということから、「4」と「1000」が話の骨格部分に属していること、また、変化がみられる細部表現に「数」が使われたとしても、「1」という最も基本的な「数」が利用されているのである。確かに、花唄のはなしの多くに、一定の語りが無いことは事実であるが、少なくとも「数」に関していうと、上で指摘したように、ある程度の規則性が見出されることから、「数」が彼女の伝承機能に貢献していたことは否めないであろう。

### 5.3 Lord (1960)

最後に、Lord (1960) が研究したユーゴスラビアの吟遊詩人(‘oral poets’)の伝承性について触れることにする。<sup>12)</sup> Lord (1960) によると、吟遊詩人は、演奏者であると同時に作曲家でもあると理解できなく、歌うと同時に歌を創り上げているのである。しかしながら、彼らが好きなように歌を發展させていくという意味ではない。彼らは安定した型を獲得し、それを使って自分自身の歌を作曲できるのである。読み書きができる人間は、口頭でのコミュニケーションは、不正確であるという偏見のある考えを持ちがちであるが、実際には、吟遊詩人は、非常に厳格な規則を守っているのである。

ユーゴスラビアの歌の安定した型は、第四音節の後で休止が入る強弱の五歩格(‘trochaic pentameter’)である。このリズムパターンは、ユーゴスラビアのシンガー(詩人)にとっては、中核を成している。我々は、読み書きができるので、かれらの歌には一定の規則があると認識するのである。しかし、シンガーたちは祖先から受け継いだ厳格な規則に従っているという事実気づいてさえいない。彼らは休止の間にいくつの音節があるか言うこともできないのである。その理由は、経験的にフレーズの長さを学んでいるからである。

吟遊詩人は、語り伝えを保存しながら、新たな公式を生成しているということに、矛盾が感じられるかもしれない。彼らが、一定の形に沿っていることは事実であるが、限られた範囲の中でさえ、自分自身の決まり文句を發展させる余地がかなりあると考えられる。Lord は、「決まり文句(‘formula’)」の定義を次のように述べている: ‘a group of words which is regularly employed under the same metrical conditions to express a given essential idea’ (Lord 1966 :30) (特定の極めて重要な考えを表現するために同じ韻律条件のもとで規則的に用いられる一連の単語)。

もっとも安定した決まり文句は、一般的な表現のためにあり、その表現とは、主人公の名前と、

行為と、場所である。しかし、その他のカテゴリーも学ばなければならない。例えば、出来事が起きる場所には、決まり文句の共通のセットである場所の名前がある。「プリリプ(Prilipu)で」を意味する表現は歌のどの部分に使われるかによって三通りある。最初の行の半分では、‘U Prilipu’となり、二行目の半分では、‘u Prilipu gradu’(プリリプの町で)になり、全体の行に使われる場合には、‘U Prilipu gradu bijelome’(プリリプ、あの白い町)となる。これらの表現はユーゴスラビアの口承様式の基礎になるものである。しかしながら、決まり文句は、どんな一定であろうとも、新しい文句を創り上げるために便利な道具となる。このことは、多くの単語が重要な単語の代わりに用いられ得ることを意味する。‘U Prilipu’の代わりに、与格が3音節であるどの場所の名前でもこの位置に入るのである。また、‘a u kuli’(塔の中で)は、‘a u dvoru’(城の中で)や‘a u kuĆi’(家の中で)に変えられる。下の図式は、置き換えの体系を示している(Lord: 1960: 35)。

$$(13) \quad u \begin{cases} \text{Stambolu} \\ \text{Travnikku} \\ \text{Kladuši} \end{cases} \quad a \ u \begin{cases} \text{kuli} \\ \text{dvoru} \\ \text{kuĆi} \end{cases}$$

上の図は、置き換えの体系が一連の決まり文句の有用性と関係性を表している。要するに、吟遊詩人は、規則を破ることなく、口承伝統を発展させることができることがわかる。

Lord (1960: 36)は、吟遊詩人が詩を学ぶことと言語習得との関連性を次のように説明している: ‘The learning of an oral poetic language follows the same principles as the learning of language itself, not by the conscious schematization of elementary grammars but by the natural oral method.’ (口述での詩的言語を学ぶことは、言語自体を学ぶことと同じ原理に従っているのです、基本的な文法を意識的に図式化することなく、自然の口頭での方法によるのである。) 言い換えると、吟遊詩人は、子供が言語を習得するのとま

ったく同じ方法で歌を学んでいるのであり、無意識に決まり文句やリズムの型を習得しているのである。

また、Lord は、シンガーが、演奏中に表現を創造しているということは、彼らが独創性や表現の美しさを求めているということではないと主張している。表現すること自体が彼らの仕事であるので、独創性を出そうとするという概念は、彼らが避けるであろう無関係のことであるとして、次のように述べている: ‘To say that the *opportunity* for originality and for finding the “poetically” fine phrase exists does *not* mean that the *desire* for originality also exists.’ (Lord 1960: 45) (独創性と詩的な美しい句を見つけるという機会が存在すると言っても、独創性の願望も存在するということの意味するのではない)。実際、創造性に価値が求められているとは思われないような文や表現形式がある。シンガーは、もしありふれた句を知っていて思いつくと、ためらわずにそれらを使ったりするからであり、彼らは、ありふれた句を知らなかったり、思い出せない時のために、句を作り出す方法を身に付けているのだと Lord は主張している。

以上から、吟遊詩人は、言語習得のように詩を学び、厳格な規則を破らずに、口承伝統を発展させていることが十分に理解できる。民話の語り手とシンガーは表現方法の自由度にかんして、両極にあるといえるかもしれない。シンガーはリズムに縛られているため、厳しい規則性に沿って表現される。確かに民話伝承と違って、一定のリズムパターンに合わせての伝承であるが、無意識に基礎となる表現を身に付けることは、民話と共通していると捉えられる。本稿で考察したように、民話の語り手は、「数」という一要素を使う場合に、任意的でなく、規則的に用いることが観察されていることから、次のように要約できるのではないだろうか。シンガーは、厳しい規則を守りながら、創造する余地が残されていると考えられる一方で、民話伝承は、シンガーとは比べものにならない自由度を享受しているものの、ゆるい束縛が課せら

れているのである。つまり、語り手は、許容される範囲では自分の好きなように創造できる権利が与えられていると同時に、ある側面では規則性を維持する義務も担っていると言えるだろう。

## 6. 結論

本稿では、清海(2015b)でデータ調査した結果をもとに、2節で『日本昔話百選(改訂新版)』(2003)の各話で用いられている「数」の組合わせを分類し、3節で種類別ごとに傾向を探った。その結果、次のような傾向が示された。

- (14) 「数」が1種類だけの場合には、「1」である可能性が高く、二桁以上の「数」が用いられる可能性が低い傾向がみられた。
- (15) 2種類の数詞が使われている話は、「1」と別の「数」(一桁)との組合わせの傾向が高いことが分かった。
- (16) 3種類の数詞が用いられる話では「1」を含み、他の「数」は一桁である傾向が高い。
- (17) 4種類の数詞が用いられている話では、 $\{(1, 2, x, y) : x, y \neq 1, 2\}$ という組合わせになる傾向が高く、約6割が二桁以上の「数」を含む。
- (18) 5種類の数詞は $\{(1, 2, 3, x, y) : x, y \neq 1, 2, 3\}$ になる傾向があり、約6割は二桁以上の「数」を含む。

また、近接関係という視点から捉え直すと、今回のデータでは、 $\{1, 2, 3\}$ までの結び付きがある程度強いが、 $\{1, 2, 3, 4\}$ 以上は、連続性が保たれにくい傾向があるのではないかと提案した。「数」に於いての反義性(一桁と三桁以上との対立)に関して、4種類から5種類の数詞が使われている話には、相対的に反義的用法が多い傾向があると推測された。

4節では、今回の民話の中で最も「数」の種類が多い2話を選び、テキストの中で多種の「数」がいかに使用されているかについて観察し、複数の「数」を提示する方法には、秩序があることを

発見した。即ち、11種の一桁から四桁までの「数」を含む『龍宮女房』では、前半に一桁の「数」だけが使用され、後半から二桁以上が用いられていた。12種の数詞を含む『うぐいすの里』は、「11」を除く「1」から「13」までの近接する「数」が用いられていた。

5節は、語り手の伝承能力の視点から「数」の役割を検討した。特に、高木(1983)の「安東花」という語り手が同一の話を3回記録したデータには、一定の語りがないが、「数」に関してはある程度の規則性が見出された。民話において「数」が伝承機能の一端を担っていることは間違いないであろう。最後に吟遊詩人の伝承について、Lord(1960)に触れた。シンガーは厳格な規則に従って口承伝統を創造しているが、詩の習得が言語習得と同じように意識的なものでない点は民話の伝承とある程度共通していると指摘した。またシンガーは、厳しい規則を守りながら、創造する余地が残されていると言えるが、他方、民話伝承は、創造の自由が与えられているものの、ある側面では規則性が保持されるような拘束力もあることを提言した。

## 注

- 1) 宮地(1972)は、日本語の「数詞」は、「数」を表す部分(例: ひと-, ふた-)と数えられる対象の種類を表す部分とで成立し、助数詞を伴わない「二」、「三」、「two」、「three」とは区別されるべきであると考えている。また、松本(2006: 33)は、「数」を直接符号化された「数字」と、数えるために形式化された「数詞」に分けている。しかし、本稿では、「数」と「数詞」は厳密に分類することなく、同等に扱う。
- 2) 本稿では、「民話」を「昔話」とほぼ同義語として使用し、伝説や世間話とは区別している。
- 3) 本稿で扱った『龍宮女房』の分類は、以下の4種類のタイプ・インデックスによると次のようになる。

- (A) [IT] (日本昔話タイプ・インデックス) 稲田浩二『日本昔話通観』28「昔話タイプ・インデックス」1988同朋舎出版の番号とタイプ名 [215「龍宮女房」]
- (B) [AT] Antti Aarne, Stith Thompson: The Types of the Folktale 1964 Helsinki (FFC184) [465, 677\*]
- (C) 『日本昔話名彙』(柳田国男監修・日本放送協会編『日本昔話名彙』1948 日本放送協会) [竜宮女房]
- (D) 『日本昔話大成』(関敬吾『日本昔話大成』全12巻1978, 1979角川書店) [114]
- 4) 本稿で扱った『うぐいすの里』の分類は、以下の4種類のタイプ・インデックスによると次のようになる。
- (A) [IT] (日本昔話タイプ・インデックス) 稲田浩二『日本昔話通観』28「昔話タイプ・インデックス」1988同朋舎出版の番号とタイプ名 [86「鶯の浄土」]
- (B) [AT] Antti Aarne, Stith Thompson: The Types of the Folktale 1964 Helsinki (FFC184) 記載なし
- (C) 『日本昔話名彙』(柳田国男監修・日本放送協会編『日本昔話名彙』1948 日本放送協会) : [見るなの座敷]
- (D) 『日本昔話大成』(関敬吾『日本昔話大成』全12巻1978, 1979角川書店) [196A・B]
- 5) 「とまえ」は土蔵の数を数える助数詞である。
- 6) 1尋は、1.8288メートルである。
- 7) 今井・針生 (2007: 124-6) によると、子供は、2歳半には一般性の高い助数詞(「個」「つ」)を産出するが、4歳の子どもが、実際に使いこなせる助数詞は「つ」「個」「人」の3種類の助数詞だけであるという。
- 8) 『龍宮女房』には、「数」の他に、擬態語・擬声語が効果的に用いられていることも指摘しておく。例えば、擬態語は、「ばたばた」「ぐんなり」「ぼっかり」「どっさり」「そうそうと」などが前半に使われている。近藤(1983: 57-61)は、目が不自由なトシ姫の語りを分析し、その

特徴として、語り手固有のリズムがあり、その手段の一つとして擬態語・擬声語が効果的に使われていると述べている。擬態語・擬声語は、語りの場面に軽快さや重厚さを生み出し、臨場感を与えるなど、聞き手に強烈な印象を与えると説明している。

- 9) 佐久間(1983b: 29)は、時をおいて、同話を複数回採録したが、ヨスミ女がノートを見て語った時と、見ないで語った時があるため容易に比較できないと説明している。
- 10) 高木(1983)の用いる「説話」は本稿での「民話」とほぼ同等であると考えられる。
- 11) 高木(1983: 132)は、注(5)で、広島県比婆郡東城町帝釈峡の市村定美翁が忠実な語り手であり、文芸的な伝承をする類の伝承者として紹介している。市村定美翁は完全に語りとして表現できなければ、知識として知っているだけの話は頑なに伝承を拒否していたという。また、山田(1980)は、語り手にかんして伝承に忠実であろうとする伝承性の強い「伝承者型」と、本人の個性や興味、雰囲気に合わせて作り変えようとする創造性の強い「創造者型」の二類型を提示している。
- 12) 日本でも、浄瑠璃語りや、琵琶語りのような三味線や琵琶などの演奏に節をつけて歌うように語る伝承文化がある。琵琶法師については、兵藤(2009)、また女性の口承芸人である瞽女<sup>こめ</sup>にかんしては、岩瀬(1983)、佐久間(1983a)、グローマー(2014)等を参照のこと。

## 参考文献

- 石川克知・高橋吉文 2014. 『グリム童話集』における数字使用：コンピュータ検索と作品内在分析の連携』『メディア・コミュニケーション研究』(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院) 66: 1-57.
- 稲田浩二・稲田和子(編) 2003. 『日本昔話百選(改訂新版)』三省堂、東京.
- 今井むつみ・針生悦子 2007. 『レキシコンの構築』岩波書店、東京.

- 岩瀬博 1983. 「昔話の語り手としての瞽女」  
野村純一 (編) 『昔話の語り手』 19-35.
- 河合隼雄 1977 (1978<sup>2</sup>). 『昔話の深層』 福音  
館書店, 東京.
- 清海節子 2013. 「日本と英語のなぞなぞ比較(3)」  
『駿河台大学論叢』 47: 109-141.
- 清海節子 2014. 「個人名となぞなぞに探る日本  
語に於ける『1』の属性と用法」『比較文化研究』  
(日本比較文化学会) 113: 86-99.
- 清海節子 2015a. 「『数』の背後にある意味: 「な  
ぞなぞ」と「ことわざ」から考える数詞の日英  
比較」『駿河台大学論叢』 49: 125-159.
- 清海節子 2015b. 「民話における数の種類と役  
割(1): 先行研究と日本民話に於ける数の用法」  
『駿河台大学論叢』 50: 45-78.
- グローマー・ジェラルド 2014. 『<sup>こ</sup>瞽<sup>ざ</sup>女うた』  
岩波新書, 東京.
- 近藤雅尚 1983. 「昔話とその管理者—小林トシ  
—」野村純一 (編) 『昔話の語り手』 46-63.
- 佐久間惇一 1983a. 『瞽女の民俗』(民俗民芸双  
書91) 岩崎美術社, 東京.
- 佐久間惇一 1983b. 「越後の語り手 — 波多野  
ヨスミ—」野村純一 (編) 『昔話の語り手』  
12-45.
- 高木史人 1983. 「はなしの伝承機能と伝承意識  
— 安東 花 —」野村純一 (編) 『昔話の語り  
手』 108-134.
- 新妻仁一 1996. 「アラビア語の数詞の意味と  
『13』の物語: ダマスカスの民話から」『東と西』  
(亜細亜大学言語・文化研究所) 14: 72-100.
- 野村純一 (編) 1983. 『昔話の語り手』 法政  
大学出版局, 東京.
- 兵藤裕己 2009. 『琵琶法師 — <異界>を語る  
人びと』 岩波新書, 東京.
- 松本克己 2006. 『世界言語への視座』 三省堂,  
東京.
- 水沢謙一 1972. 『黒い玉・青い玉・赤い玉: 越  
後の三枚の札』 野島出版, 新潟.
- 宮地敦子 1972 (1981<sup>2</sup>). 「数詞の諸問題」 鈴  
木一彦・林巨樹 (編) 『品詞別 日本文法講座2:  
名詞・代名詞』 56-78, 明治書院, 東京.
- 山田八千代 1980. 「昔話と語り手— 愛知県西尾  
市を中心に—」昔話研究懇話会 (編) 『昔話の語  
り手: 昔話—研究と資料—第九号』 50-68, 三弥  
井書店, 東京.
- Lord, Albert B. 1960 (1981<sup>4</sup>). *The Singer of  
Tales*. Cambridge: Harvard University Press.
- Lüthi, Max. 1968. *Das Europäische Volksmärchen:  
Form und Wesen*. Utb Fuer Wissenschaft.  
English version: *The European Folktale:  
Form and Nature* (Folklore Studies in  
Translation), trans. John D. Niles. 1986.  
Bloomington: Indiana University Press. (マッ  
クス・リュティ, 小澤俊夫訳『ヨーロッパの昔  
話』(民俗民芸双書37) 岩崎美術社, 1969)